

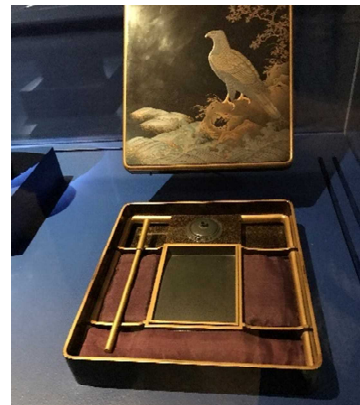
パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

4 装飾芸術美術館「Luxes」展（2020年10月22日）

ルーブル美術館の隣にある装飾芸術美術館で、「Luxes」展が開催されています（2021年5月2日まで）。古代から現代までの世界各地の装飾品や工芸品を通して、le luxe（豪華さ）の意味や形の移り変わりを紹介する展覧会です。

展覧会が始まる前に美術館の方が、ヨーロッパの工芸品とは異なる豪華さを持つ日本の作品は、展覧会の中で重要な役割を担っていると教えてくださいました。例えば、江戸時代に作られた蒔絵の硯箱は、黒い漆と金を使った蒔絵の対比が美しい作品です。蒔絵は、漆で絵や文字を描き、漆が乾かないうちに金などの金属の粉を蒔いて表面に定着させる手の込んだ技法です。

日仏合作のリキュールセットは、17世紀に日本で輸出用に作られた蒔絵の箱の中に、水晶と金を使って18世紀にフランスで作られた道具がぴったり収まるようになっています。何と贅沢なのでしょう！



エルメスのケリーバッグと金継ぎした美濃焼の茶碗が並べて展示されています。フランスのバッグと日本の茶碗は何

も関係なさそうに思えますが、説明のパネルによると、この二つには共通点があると言います。金継ぎとは、陶磁器が欠けたり、ひびが入ったときに、漆で接着して、金などの金属粉で装飾する技法です。金継ぎすることによって、道具が生き返って後世に伝えられるだけでなく、欠ける前の姿とは違った美しさも生まれます。ケリーバッグも、傷んだら修理をして次の世代へ引き継いでいきます。エルメスの創業家のある方が20世紀前半に、高級品とは修理していくものだと述べたそうです。価値のあるものを大切に扱って次の世代へ受け継いでいくのは、日本とフランスに共通するものであると言えます。道具が一度傷ついたら終わりではなく、手を加えることで道具の価値を高めた日本の職人の知恵が、フランスの展覧会で紹介されたことを嬉しく思いました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

この他には、孔雀の羽を使った陣羽織、イッセイミヤケがデザインしたシンプルな白い洋服なども展示されています。

同時に開催中の「Le dessin sans réserve」(2021年1月31日まで)では、この美術館のコレクションの中から模様や図柄に関する作品をアルファベット順に紹介しており、日本の「Katagami」(中型染の型紙)を見ることができます。